

5. 図面保管管理

5.1 実地調査

5.1.1 実地調査要領

1) 調査の目的

実地調査では、鋼橋および、その他建設関連図面の保管状況の詳細調査として、国内外の複数の調査対象先について現地を訪問し、関係者からのヒアリングも含めた調査を行った。5.2 で述べるアンケート調査は、国内関係機関における図面保管状況を広く包括的にとらえることを目的としたのに対し、実地調査では、図面の保管数が多い機関、あるいは海外を含み比較的図面保管が進んでいると思われる機関を中心に、調査を実施した。アンケート調査の結果と併せて、今後の国内の図面保管・管理のあり方を探るために、鋼橋およびその他土木図面の保管・管理の実態を明らかにする。

2) 調査対象

a) 国内

調査対象先は、鉄道総合研究所、土木研究所、東京都土木技術センター、長野県立歴史館、および東京都公文書館の5箇所とする。ただし、鉄道総合研究所、土木研究所については、機関の所属者へ調査項目を送付し、調査を委託した間接的な調査である。

b) 海外

イギリス2箇所、アメリカ1箇所の3箇所を対象とする。

表 5.1 調査対象

	調査対象機関	所在地
国内	1 (財)鉄道総合研究所	国分寺市光町2-8-38
	2 (独)土木研究所	茨城県つくば市南原1-6
	3 東京都土木技術センター	東京都江東区新砂1-9-15
	4 長野県立歴史館	長野県千曲市大字屋代字清水 科野の里歴史公園内
	5 東京都公文書館	東京都港区海岸1丁目13番17号
海外	1 イギリス土木学会(ICE) 図書館、およびアーカイブの図面	1 Great Gorge Street London (ロンドン市内)
	2 イギリス、ギルドフォード図書館(Guildford Library) プリント・図面部門	Guildhall Library, Canon street, London (ロンドン市内)
	3 アメリカ、ハンチントン図書館(Huntington Library)、The Munger Research Center	1151 Oxford Road, San Marino, California 91108, USA (ロスアンゼルス郊外)

3) 調査項目・方法

調査の項目は、別途示す基本（共通）調査項目および、個々の調査対象先の特殊性を加味した項目の両方について行った。調査方法としては、①施設、設備、備品等の立会調査（視察）、および、②保管システム、制度などに関するヒアリング調査によった。

施設、設備、備品等の実地立会調査においては、調査機関の了解のもと極力写真による記録を残すものとし、詳しく撮影する。保管システム、制度などに関する内規、規定など関連資料の収集にも務めた。なお、特に、公文書館、図書館など土木の専門関係者がいない機関の調査にあっては、訪問前にあらかじめ質問項目を送付することで調査の効率化を図った。

a) 基本調査項目（共通）

調査の基本的な項目は以下のとおりであるが、対象先の状況に応じて、適宜取捨して実施した。

- ①機関の一般情報：建物面積、収容資料、人数、収集分野など（多くはHPより）
- ②収集資料の分類
- ③図面関連資料の分野、種類、形態、数量
- ④図面形態ごとの保管方法、現物、電子化、マイクロ化
- ⑤台帳など管理システム、図面整理方法
- ⑥閲覧、公開
- ⑦図面保管庫
- ⑧修復方法
- ⑨電子化の予定
- ⑩図面の所有権
- ⑪図面収集方法
- ⑫設計計算書などの図面以外資料
- ⑬図面以外の技術資料（映像、その他）
- ⑭検索方法
- ⑮展示など一般へのサービス
- ⑯図面保管に関する他機関との連携
- ⑰図面の資料全体での位置づけ、図面とし保存か他資料の付録資料か
(公文書館は他の分類で含まれる図面の探索が必要か)

b) 個別調査項目

調査対象期間の特殊性を考慮して設定した。

5.1 実地調査

5.1.1. 東京都土木技術センター

(1) 日時 平成 19 年 7 月 19 日(木)14 時～15 時 30 分

(2) 場所 東京都土木技術センター、技術支援課

(3) 調査結果

1) 機関の一般情報

東京都技術センターは、平成 18 年度からの組織改変により、研究から情報支援に役割変更となった。従来、研究活動が主体であったが、研究活動から、蓄積された研究成果（ノウハウ）をもとに、技術支援をする組織にその役割が変更となり技術支援のための調査が主体となった。

図面の保管はこれからの課題として、この技術支援の範疇として取り組みの対象とされている。現状は、資料収集の段階で、業務支援に加工、整理に動き出したところである。平成 18 年度は古い調査書を収集し、組織としてアーカイブ室を新たに設置した。

2) 保管方法、現物、電子化、マイクロ化、台帳など管理システム、図面整理方法

原則として図面は、原則として東京都建設局の各事務所で保管しているが、その保管実態は未調査で把握できていない（図面が置かれている倉庫は分散しているので、どこに何があるかは分からない）。一部図面センターで集中管理の場合もある。古いものは倉庫に保管されているが、閲覧などの整理はされていない。ほとんどは事務所管理の当時の丸筒に丸めて入れてある。その他の図面の収集については、これからの課題となっている。図面保管方法についても、丸筒のままか棚にするかもこれからである。図面の保管は原則として、現物として保管を考えているが、閲覧などの便を考慮すれば、職員の要請があればデジタル化も検討する。ただ、一部デジタル化したものもあり、保管用の解像度と目録用の解像度の 2 つに分けて対応している（土セにある 200 本について。全てか一部かは不明）

図面の状態を保つために管理として丸筒に乾燥剤を入れているが、傷みやシミが出ているものもある。染みも出ている。

全体としては、図面管理は、まだ着手したばかりで、今後、保管の体系化が課題である。

3) 閲覧、公開

図面の閲覧、公開は、東京都の職員への限定公開を予定している。手順としては、目録作成→建設局の職員に提示→（職員のリクエストあるものについて）デジタル化（一般図程度）→土木技術センターにて閲覧提供の流れで考えている。

建設局内部に対して青図にして貸出すか、デジタル写真で撮影してもらうかは検討中である。外部への公開については、今後の課題である。ただし公開する場合でも使用目的として公益性が必要である。

図面以外に、昭和 20～30 年代の社会資本関連の写真類については、デジタル化しており、マスコミなどからの依頼に対しては、プリントアウトして提供している。また、使用にあたっては「提供：東京都建設局」のクレジットを入れてもらうようにしている。これらのデジタル化の目的は、外部提供ではなく、建設局内部での使用を考えたものであり、

デジタル化の費用もそのためのものである。

4) 図面収集方法

図面を主体に考え、設計計算書類は収集対象には考えていない。現在、土木技術センターにあるものも図面が主体であり、勝鬨橋の変電所2階に保管されていたもので、対となる設計計算書はなかった。

アーカイブ室が設置されたという情報が各事務所に流れるようになり、ライブラリーが立ち上がったということで、各事務所から古い図面に関する情報が来るようになった。現在保管している約200本図面保管筒の目録を作成し、それから各事務所にある図面の収集にあたる予定である。

各事務所では、倉庫の容量が不足しているのこれからどんどん廃棄されるであろう。保存では選択が必要と考える。収集の基準が必要であろう。それは規模か著名かという評価基準ではないか。

土木研究所で古い図面が発見され、整理のための目録を作成しているなら、それと同じような項目で目録を作成することも検討したい。整理の作業にあっては外部（大学等）との共同も検討したい。

5) 設計計算書などの図面以外資料

昭和20～30年代の社会資本に関する写真も数多くストックしているほか、古いパンフレットも収集している。これらは、施設の補修や古い施設を説明する目的で収集しており、現物の保管とデジタル化を行っている。

6) 図面保管に関する他機関との連携

東京都中央図書館などからの問い合わせがあった場合、それへの回答をする範囲の協力はしているが、積極的な提携はしていない。東京都公文書館とも連携はない。

7) 重要文化財橋梁図面の扱い、その他

最近の重文指定の3橋（清洲、永代、勝鬨）に対する特別の図面保管の措置は特にしていない。特記すべきこととして、旧新大橋の原図の所在を確認した。樺島が描いた唯一のものの可能性もあり、第一級の歴史的橋梁の図面である。今後、保存を進むためには現在保管している図面の評価が必要である。評価については、センターとしては、然るべき立場のものが評価をしないと価値は認められにくい。もしインターネットで公開するなら、解題をつけるなどをして、保管されている図面の価値を知らせる必要がある。

8) 資料全体での位置づけ、図面とし保存か他資料の付録資料か

センターとしては、「図面」としての保存を予定している。ただし、アーカイブとして立ち上がったばかりであるので、方向性はかなり流動的である。

9) 調査での印象・所感

アーカイブとしては、まだ方針が固まっておらず、また、組織的な調整、整備が優先課題としてある。図面保存を含むアーカイブとして機能するためには今後に向けて多くの課

題がある。この中にはアーカイブの専門的な点からの検討が必要である。

橋梁については、東京都は著名橋も多く、貴重な図面が発見される可能性がある。まず資金的な問題があるが、将来的には建築分野で実施しているように、東京都所蔵も含めた関係機関で連携した土木図面ライブラリーの立ち上げることができれば理想である。東京都の現在の所蔵に匹敵する図面は、大阪市、その他、大きな自治体でも残っている可能性が高い。



写真 5.1 傷みの激しい保管図面原図



写真 5.2 勝鬨橋の変電所から移設した図面筒

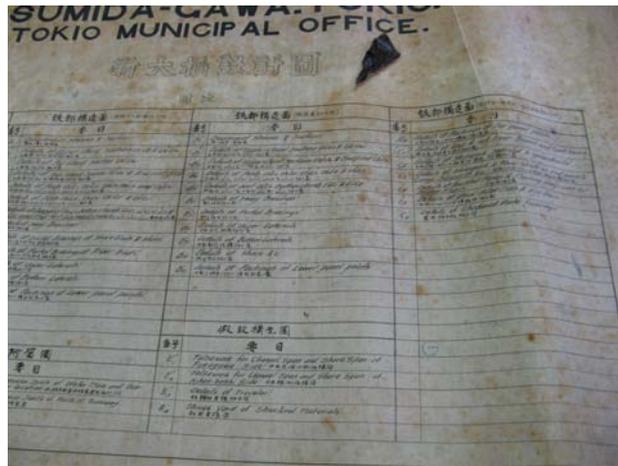


写真 5.3 旧新大橋図面リスト



写真 5.4 保管されている図面原図（未整理）



写真 5.5 吊るし保管

5.1.2. 東京都公文書館

- (1) 日時 平成 19 年 8 月 23 日 10:15～11:30
- (2) 場所 東京都公文書館（東京都港区海岸 1 丁目）
- (3) 調査結果

1) 施設の概要

昭和 43 年(1968)10 月 1 日に、都政史料館と総務局総務部文書課の機能の一部を統合して東京都公文書館が開設された。日本で 2～3 番目の開設である。東京都公文書館は、東京都の公文書や庁内刊行物などを系統的に収集・保存し、これらの効率的な利用を図ることを目的としている。また、東京都に関する修史事業を行っている。

建物は築 40 年程経過しているため、老朽化している。現状では湿度管理ができず、空調も 9:00～17:00 の間のみと保管水準が悪い。50 年経過を契機に移転などの話が出るであろう。

2) 収蔵資料

戦前期と戦後期で収集した資料の性格に違いがある。戦前期は東京府や東京市が集めた資料、江戸期の絵地図などである。これらのうち、東京府からの引継ぎ文書（1868（慶応 4）年から 1943（昭和 18）年）約 22,400 冊と、東京市からの引継ぎ文書（1889（明治 22）年から 1943（昭和 18）年）約 12,100 冊は、東京都の指定文化財となっている。

戦後は、東京都の文書管理規則に基づいて収集している。この管理規則では、長期保存文書を収集することとなっており、図面だけが対象となっていない。

昭和 17～18 年にかなり戦災での被害を避けるために疎開をさせており、そのため戦前期の資料も比較的残っている。戦前期は市史編纂で集めたものがほとんどである。戦前期の資料でも事業単位の性格が強い。現在は戦前期の史料の発掘はしていない。

他の機関との交流、連携はあまりない状況である。都立中央図書館や江戸東京博物館との交流もほとんどない。東京都公文書館は知事部局であり教育委員会の文書は対象としていない。展示では中央図書館と共同したことはあるが本来的な役割ではないと考えている。

3) 図面、土木関連の収蔵資料

戦前期のものは図面のみの収集もあるが、戦後期のものは図面のみの収集は行っていない。ただし、都市整備局の地形図（1955（昭和 30）年から）5,000 点は集めている。戦後期のものは、文書管理規則で扱っており、長期保存文書の中に図面だけあれば一緒に保存している。なお、図面は非文書ではあるが紙資料として扱っている。

建設部局からは長期保存文書として土地などの権利書関係が多く、都営住宅の竣工に関する資料も入ってくるが、契約関係はほとんど入ってこない。

決済文書を集めるのが主なので図面などの技術文書はどうしても従となる。図面を残さないのは、図面単独で意味を見いだすことができないので、その価値が判らないのはいか。未整理（例えば映像）が多いので、土木図書館のノウハウを知りたい。

図面のほかに映画フィルムなども収蔵されており、その保存については、近代美術館フィルムセンターなどに相談しながらすすめている。現在積極的に収集しているのではなく、

現在あるものを対象としている。フィルムのような非文書資料では再生装置の問題があるので、公開については今後の課題として検討中である。

4) 図面の保管

決済文書に付帯している図面は、簿冊のまま保管しており、図面そのものとしては保管していない。閲覧中に破れてしまうなどの破損もあり、青焼図面は劣化が始まっている。後年閲覧を考えるとからも閲覧になんらかの工夫が必要である。

5) 収蔵資料のデジタル化

戦前文書はかなりマイクロフィルム化しているが、事業として一本立ちするところには来っていない。電子化がよいと思うが、図面はサイズが大きいのので難しい。

戦前のマイクロフィルムの 50%ほどは Tiff 画像にして、両面 DVD で約 1,000 枚ほどとなっている。電子化の場合はメンテナンスの仕事が増えてしまうのがネックである。

デジタル化についてはスタンダードが無い。それがネックとなっている。

6) 閲覧・公開

指定文化財になっている江戸図もオリジナルを閲覧しているが、リクエストの多いものは複製を作り閲覧に供している。

7) その他

公文書館については歴史学系の人が多く図面について説明できる人がいない。また、何が大事なのかわからない状況である。

非文書資料については組織の統廃合で預ってほしいというものが来るが、長期保存文書以外は断っている状況である。



写真 5.6 収蔵庫（江戸図などの貴重書）



写真 5.7 平置き用の桐製の棚も用意された



写真 5.8 江戸図は折畳んで収蔵されている

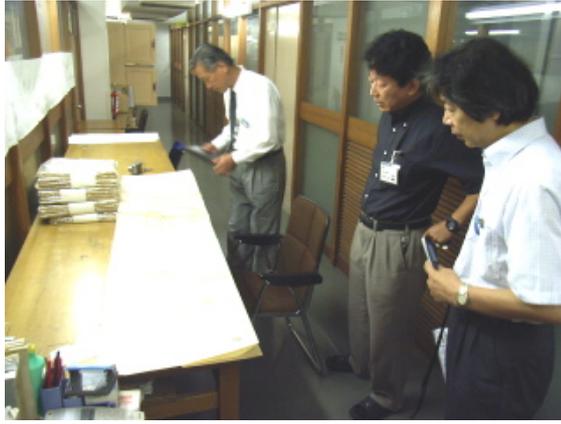


写真 5.9 収蔵室内の作業用閲覧テーブルでの閲覧



写真 5.10 東京都指定文化財となっている江戸図の一つ。折畳んで保管されていることがわかる



写真 5.11 図面保管筒

測量図面などは筒に入れられて、ロール状に保管されている。原局での保存時の整理番号やタイトルが保存用の包みに書かれていた。収納されたままでとくに整理はされていない。



写真 5.12 図面が収納されたロッカー
図面によってはロッカー内にも収蔵されており、ロッカーの上にも積上げられている



写真 5.13 ロッカー内にロール状に保管されている図面



写真 5.14 平置き用のスチールケース



写真 5.15 測量図面を収蔵室内のテーブル上に広げた様子



写真 5.16 平置き収納されている測量図面

5.1.3. 長野県立歴史館

(1) 日時 平成 19 年 8 月 22 日 14:10～15:30

(2) 場所 長野県立歴史館（長野県千曲市大字屋代字清水・科野の里歴史公園内）

(3) 調査結果

1) 施設の概要

長野県立歴史館は、1994（平成 6）年に開館した登録博物館である。「考古資料・行政文書・古文書等」の収集、保存、調査研究、情報提供及び展示等を行い、文化財への親しみと理解を深めるための歴史学習活動を支援することを目的としており、公文書館＋埋蔵文化財センターの資料センター機能を持ち、その成果を公開している部分が博物館として機能している。そのため、長野県に関係する古文書、県などの行政文書、第二次世界大戦後の現代史料などが収集され、明治以降の県庁文書や、信濃史料・県史・県政史・県教育史などの修史事業による収集史料も収蔵されている。土木関連では、長測図が大量に保管されている。

2) 図面，土木関連の収蔵資料（長測図）

土木関連の「長測図」は、長野県土木部が作成した図面の集りで、元は県土木部が保存していた。昭和 43～44 年頃の県庁改築時に文書蔵内にあった第二次世界大戦前のものが長野県立図書館に移管された。この時は、現用資料で保管場所の変更扱いであり、管理は県土木部が担っていた。元々は簿冊（およそ 1 万 2 千～3 千）と一緒にのものであったが、簿冊から分れて保管されていた。この間、行政文書については県の許可を得て県立図書館で閲覧が出来たが、図面については対の関係が切れてしまった。説明によると、昭和 50 年代初めの簿冊整理において、原議と図面が分れた模様である。

1994（平成 6）年の歴史館開館にともない、現用を終えた非現用資料として、行政文書を県立図書館から歴史館に移管することとなり、その時に図面が見つかった。このため、行政上の文書とのつながりがわからないものの、図面は資料的な価値が高いと思われる、目録の作成が進められてきた。なお、県庁土木部の現役職員が来館し調査・研究を行っているなかで、簿冊とのつながりなどのアドバイスなどをもらったりしているとのことである。

また、丸めて保管されており、劣化しているものも多いとのことである。

3) 収蔵資料の受入れなど

文書館としての機能があるので（説明によれば、文書館としての機能が主であるとのこと）、長野県庁で保存期限が切れたものを歴史館で受入れている。ただし事業単位での移管である。

土木に関するものはすべて移管しているわけではない。事業完結から 30 年の被告会規程がある。実際は整理がつかないので公開といっても大変な状況である。なお、土地改変については歴史館で扱うように持ってきている。

文書保管庫であるが、複数段の棚の総延長は 9.2 キロメートルにおよぶ。開館より 13 年目で 70%ほど埋まっている。また、建物の構造上一層式なので書架が高くなっている。地震の揺れなどを考え、上の 2 段を使っていない。

4) 図面の保管

図面は丸めて棚に横置されているものと、平置きで別置きしているものがある。

土木関連の図面コレクションである長測図は丸めて保存されている。絵図などは平（ぺら）に修復されるため、裏打されるのでおることが出来なくなることから、木製図面ケースに平置きで別置きしている。ケースに入らないものはロールにしている。なお、絵図面の間にはフィルムをはさむことも検討したそうである。

長測図については、丸めて保存されているが、数枚の図面を束にして丸めているものもある。閲覧にあたり、丸めてあるものを伸ばす必要があることから閲覧性が良いとはいえない。また、ケント紙などはかなり状態が悪くなっているとのこと。

特に、長期間丸めて保管されていたことから巻きが強く、広げて見る時に押えている人が必要など、対応に人員を必要とするものもあった。なお、歴史館では広げて重ねた方が良いのか、また群のままで良いのかなどを検討中とのことである。

5) デジタル化

天竜川、千曲川の明治 20 年代と明治 30 年代の測量結果については、北陸地方整備局、中部地方整備局によって、デジタル化を行ってもらった。

状態が悪くなっているので電子化の必要性を感じているが予算化できないことで進んでいない。なお、長野県では県が文化その他のデジタルアーカイブの検討を始めた。総小計の事業で観光目的が強いが必要なものを盛込みたい。しかし、事業主務担当との考え方が異なるためにデジタル化の基準、対象についてはなかなか難しいが、千曲川、天竜川沿いのものは対象となるようにしたいとの説明であった。

また、本物をアーカイブス化することが最高であり、リアルとデジタルの両方をすすめたい。基盤として実物アーカイブスがあり、その上にデジタルアーカイブスがあり運用、活用されると考えている。行政部局は捨てることが前提であるがその考え方を変える必要性を認識しているとの話であった。

6) 閲覧・公開

図面の展示を行って紹介を行っている。

なお、簿冊については、慶応年間～昭和 21 年にかけての簿冊 1 万 2 ～ 3 千冊の現物を閲覧してもらっている。

7) その他

他の施設との連携は全くない。公文書館は松本市が持っている。長野市も市立の公文書館を立ち上げる。公文書、旧村文書が対象である。

橋銘板もアーカイブ集の対象として、図面、文書、橋銘板がセットとなっており、実物資料も対象となっている。

図書類については活用が進んでほしい。例えば、技術的に困難であったということが行政文書から確認できるなど、そういう研究が進むことで、図面の意味や価値認識が進むことを期待する。戦前の簿冊が平成 20 年度には県指定文化財となる予定である。これを機会に長測図（コレクション）も指定文化財となるようにしたい。



写真 5.17 収蔵庫内部



写真 5.18 収蔵庫内の図面保管状況



写真 5.19 収蔵庫内の図面保管状況(拡大)



写真 5.20 面の収蔵(右手棚)は他の文書(左手)と同じ収蔵庫に保管



写真 5.21 はロール状で保管されているものが多い



写真 5.22 ロール状に保管された図面には原局（または県立図書館）での保存時の整理番号やタイトルが保存用の包みに書かれていた



写真 5.23 面によってはロール状態であるものの、箱に入れて保管されているものもあった

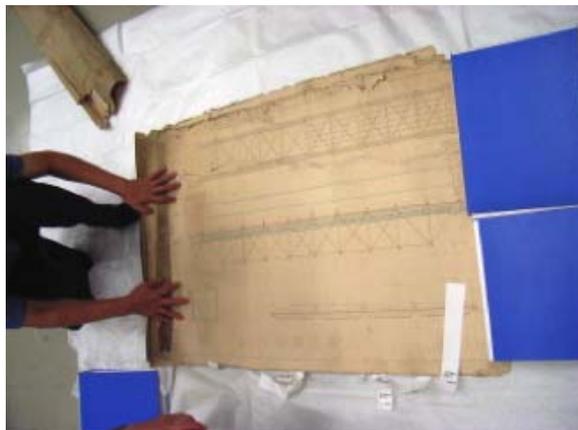


写真 5.24 ロール状に保管されている図面をのぼして閲覧する。文鎮など重しを片側に置いて開いている



写真 5.25 ロール状の図面を拡げて閲覧している様子

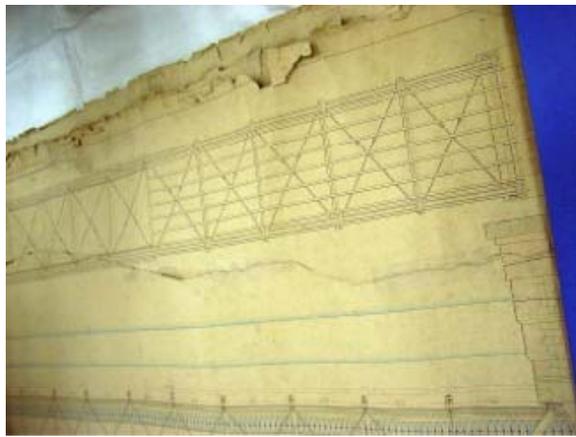


写真 5.26 保管されている図面の例(木鉄混合橋)

5.1.4. 鉄道総合研究所

質問書に対する回答の形式で実地調査に代えた(注)。

(注：他の機関と同様に、学術的目的での図面保管状況の実地調査・見学を依頼したところ同研究所としてはJR各社からの委託を受けて預かり保管をしており、セキュリティ上の問題もあり、質問書へ回答する形式となった。この同研究所の判断は公共性のある構造物の図面保管管理者の判断として当然ありうるもので、今後、特に現存する構造物の図面については、学術的目的で史料としての公開とセキュリティの関係から検討すべき課題提起である。)

1) 図面関連資料の分野、種類、形態、数量

保管図面の内容としては、旧日本国有鉄道構造物設計事務所より継承した主として昭和初期～昭和62年設計の鉄道橋梁関係図面である。保管の形態としては、マイクロフィルム（アパチュアカード）で約7万コマを保有する。

2) 保管方法、現物、電子化、マイクロ化

図面保管は、専用キャビネットを用いて収納し、さらに、アパチュアカードをpdfファイル化して保管している。

3) 台帳などの管理システム、図面整理方法

手書きの記入式台帳（原簿）およびこれに基づく図面一覧表（印刷物）で管理をしており、pdfファイルは、図面番号から（橋梁名では不可）検索が出来る。

4) 閲覧、公開

JR各社から依頼があった場合のみ閲覧、コピーサービス可。一般は不可。

5) 修復方法

図面の修復などは特に行っていない。

6) 電子化の予定

電子化済

7) 図面の所有権

鉄道総合技術研究所（旧国鉄よりJR各社の協定に基づき継承）

8) 図面の収集

JR発足（1987）年以降の新規の追加は行っていない（旧国鉄の作成図面のみ）

9) 設計計算書等の付属資料

なし

10) 図面以外の技術資料

国鉄時代の橋梁写真（昭和10年代以降のものが断片的に100枚程度）を保有する。隅田川震災復興橋梁（永代橋、清洲橋など道路橋）の下部構造の工事写真（東大にある上部構造の施工写真と一対と思われる。田中豊博士旧蔵か？）もある。沼田政矩博士寄贈資料に橋梁関係図面などがある（未整理）

11) 検索方法

パソコンにより検索、プリント可能である。図面番号でのみ検索可能なため、橋梁名や諸元では検索できない。台帳には橋梁名の記載もある（すべてではない）。

15) 図面保管に関する他機関との連携

行っていない

16) 全体での位置づけ

一般の図書資料は公開しているが、図書類は業務用資料として位置付けており、一般には公開していない。旧国鉄から継承した財産をJRを代表して管理しているという原則があるため、公開するためには、JR各社の同意が必要になる。JRからリクエストがあった場合は、無条件で提供している。

5.1.5. 独立法人土木研究所

1) 機関の一般情報

土木研究所は、日本を代表する土木技術の総合研究機関で、その前身は、大正 11 年(1922) 9月に内務省に設置された土木試験所である。戦後、内務省が解体され、建設省が設置された際、現在の研究所名に改称された。その後、平成 13 年(2001) 4月に独立行政法人化されている。

試験所発足当時の橋梁に関する調査研究の詳細は不明であるが、大正 15 年(1926)に制定された道路橋構造細目の作成に参画したとの記録がある。また、大正 14 年(1925)から昭和 14 年(1939)の間に本邦道路橋輯覧を 5 回出版している。戦後の一時期、昭和 28 年(1953)から昭和 33 年(1958)頃、橋梁設計室という部署が設置され、設計実務を行っていたようである。このような経緯から、道路橋の設計図面、計算書等の資料を収集、保管していたものと考えられる。

2) 資料の分野、種類、形態、数量

保管されていた資料は、以下のとおりであるが、まだ十分に整理、調査できていないため、詳細は未確認である。

(a) 道路橋輯覧関係資料

道路橋収攬の第三輯、第四輯に掲載されている橋梁を中心に約 580 橋の設計図面および写真。図面は大半の橋梁が一般図のみだが、上部構造、下部構造の構造図がほぼ一式揃っている橋梁もある。図面はいずれも青図で約 3000 枚。写真は約 200 枚。

(b) 増田淳関係資料

増田の会社が設計した約 80 の橋梁、地下鉄駅舎、ドック、岸壁等の設計図面および計算書。設計図面は各橋梁ともほぼ一式揃っており、大半が青図。13 の橋梁については、蠟引きの布にインク書きした原図もある。計算書は、設計計算書および材料調書で、完成版だけでなく、下書き段階、設計変更で不要になったものもあり、大半が原図、一部青焼きを含む。この他、増田の会社が業務上収集したと考えられる日本、米国の橋梁の設計図面がある。一式揃っているものと、一部分しかないものがある。図面は青図が約 1600 枚、原図が約 370 枚ある。計算書は約 10000 ページ。

(c) その他の橋梁の設計図面

- ・ 国道 6 号大利根橋 (原図約 30 枚)
- ・ 西海橋 (原図約 10 枚)
- ・ 嵐山橋 (原図約 10 枚。設計計算書もある。)

3) 保管方法、現物、電子化、マイクロ化

設計図面は、輯覧関係資料は専用の封筒、増田淳関係資料は青図は専用の保管箱に入ったものを事務用ロッカーに保管している。原図は図面用収納筒に保管している。計算書は、専用のファイルに綴じたものを事務用ロッカーに保管している。いずれの資料も複製の作成、電子化を予定しているが、増田淳関係の資料の一部しか着手できていない。

4) 台帳など管理システム、図面整理方法

元資料には台帳等なし。エクセルによる一覧表を作成中。

5) 閲覧・公開

原本については、原則公開しておらず、閲覧の要請に対しては、複製で対応。現在の管理者、研究者等からの依頼に対しては、内容に応じてコピーサービスも可。

電子化した資料については、HP上で公開を予定。

土木研究所全体で、歴史的な資料を整理し、一般公開する構想あり(例えば、風洞実験に用いた橋梁模型は展示済み)。

6) 修復方法

図面の修復等は、特に行っていない。

7) 図面の所有権

土木研究所。ただし、元の管理者の了解等は得ていない。

8) 図面収集方法

新規の図面収集は行っていない。

9) 設計計算書などの図面以外資料

以下の資料がある。

- ・若戸大橋、関門橋、本州四国連絡橋関係の資料
- ・橋梁設計室時代に設計、技術指導したと思われる橋梁の資料
- ・外国著名橋梁の一般図(複製と思われる)
- ・外国の橋梁関係図書のコピー
- ・マイクロフィルム(内容不明)
- ・戦前の橋梁写真
- ・増田淳関係の資料には、発注機関の設計書、増田と発注機関の間で交わされた書簡、増田の会社が設計時に利用したと思われる参考図書、ノート等もある。

10) 図面保管に関する他機関との連携

特に行っていない。ただし、増田淳関係資料のコピーは一般への閲覧のために(社)土木学会図書館に寄贈した。